

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節

聖霊の力

――使徒行伝2章1～21節――

1979年6月3日

小池辰雄

霊止 神霊の力 無者キリスト 聖霊のバプテスマ 「霊の貧しき者、天国はその人のもの」
十字架と御霊 根源現実 南無キリスト 霊の賜物 聖霊の愛 キリストは無限無量 聖霊の
力 ドラマチックな有機的な構造 聖霊の執成し

【使徒2】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処^{ひとところ}に集い居りしに、2 烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3 また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

5 時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、6 この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7 かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8 如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9 我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジア、10 フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11 クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大いなる御業をかたるを聞かんとは』12 みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』13 或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

14 ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、15 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16 これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17 「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18 その世に至りて、わが婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。19 われ上は天に不思議を、下は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の氣とあるべし。20 主の大いなる顕著し



き日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。21すべて主の御名を呼び頼む者は救われん』

● 霊止

「霊」という言葉は創世記から黙示録にいたるまで出てきます。人間は「魂」を有^もっている。この魂が一番、人間の中心で――しかも、それはパウロも霊と言っておりすが――時々私が書きますように、『大言海』で「ひと」というのを引く^{ひと}と、「霊止」^{とど}「霊が止まる」と書いてある。「受^{うけひ}霊」という。神の霊を受けとつて、そしてそれが止まっている。聖霊のバプテスマというのは要するにこの受^{うけひ}霊なんです。元来いただいているところの霊に新しくこの神霊がかかってくる。そのことが、

「ひと新たに生まれずば、神の国に入ることができない」

と、キリストがヨハネ伝で言っておられること。この生まれつきいただいている霊がおかしくなってしまうているわけです。本来、神に造られているんですから、神と同質である。

「神の似姿」(セレム・エロヒム)

というのは、本質が等しいということ、あの「似る」という言葉はあまりよくない。むしろ、同質ということ。同質性を失ってしまったのが、「樂園喪失」(パラダイス・ロスト)ということ。同質性を失ってしまったひと。本来は神の霊なんだ。そいつに新しくこの同質性の回復、これが「樂園回復」(パラダイス・リゲインド)です。だから、キリストの霊を受けとることが、「パラダイス・リゲインド」になるわけです。今、我々の生まれつきの人間は「パラダイス・ロスト」の人間なんだ。

そういう意味において、キリストは、洗礼のヨハネが言いましたように、

「私は水でバプテスマをするけれども、私からあとに来るものは霊と火でバプテスマをする」

と――ある写本には「火」という字がありませんが――「霊と火」ということは要するに、霊火、霊的な火です。あるときは、御霊のことを「水」ともいいます。ヨハネ伝4章にあるように。あるときは、水に例えられ、あるときは火に例えられる。

● 神霊の力

旧約の著しいところを少し見ていきましょう。士師記15章14節に、

「サムソン、レヒに至れるときペリシテ人声を揚げてかれに近づきしが時しもエホバの^{みたま}霊彼にのぞみたれば、その腕^{うで}にかかれる^{たば}索は火に^{やけ}焚たる麻のごとくになりて手のいましめ解きはなれたり。」(士師記15・14)

とある。神霊が来たら、えらい力で結わえているところの縄が解けてしまったという。もっと凄いことが使徒行伝に書いてある。「士師」というのはみんなそういったカリスマ的な



支配者で、それが次から次へと――カリスマというのは神の霊をいただいた人たち――それが首領になって、不文律に民を治めていた時期があるわけです。サムソンなんていうのはその特に著しい人です。神霊が臨んだら、とにかく一番先に表れてくる現象としては、非常に「力」として表れてくる。「エロヒーム」の「エール」「神」という字が「力あるもの」という意味だそうです。神は力あるもの。パウロが、

「福音は言葉にあらず力なり」

なんていう言い方をしているところもある。まあ、力でも、無条件にいいというわけにはいきませんけれども。モーセがエジプトでいろいろな奇蹟を行いました。これもみなこの神霊の力によっている。

ところで、預言者というのがイザヤ書からずっと旧約聖書にあるでしょ。歴史的にはアモスから始まりますけれども。預言者というのは、神の霊をいただいて、預言者においては霊と言は離すことができない。霊言です。そして、神の言を伝える。これが預言者です。詩篇の世界は、大体において下から神に向って祈っている。ところが、預言者のは、上から来ているのを伝える。神さまの言を預かっている人。神さまは主ですから、預言者は僕なんです。言を預かって伝え、また、言われる通りに行動する。口に出ては言となり、手足に出ては行いとなる。元は霊です。言行一如なんです。

「言うは易く、行いは難し」

なんていう二段構えの考え方ではダメです。これはもう両方とも直結している。言に表れるか、行に表れるかということ。表れ方が違うだけのなし。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの、キリストの福音を見たらそれがつきりしている。我々においてはズレはくる。ズレは来ても、それを外側から整えようとしたってダメなんです。

イザヤ書42章1節、

「^{たす}わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが^{えらびひと}撰人を見よ。我わが^{みたま}霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。」（イザヤ42・1）

非常にはつきりしている。イザヤ書42章は「エホバの僕之歌」の第一の歌ですけれども。

「エホバ」

というのは本来、

「ヤーヴェー」「有りて在るもの、実存者」

という意味と、

「わが主、アドナイ」

という、その二つの言葉の母音と子音とをごっちゃにしたのが「エホバ」という言い方なんです。そのことは19世紀の中頃にやっと分かった。けれども、これは両方の意味を持っているから、私は「エホバ」（実存主）という言い方が好きだから、あいかわらず使っている。学者はみんな「ヤーヴェー」と言ってますけれども。そうやって間違ったのがむしろ怪我



の光明で、両方の意味を持っている。

「実存者にしてわが主なるもの」

それが「エホバ」ということです。

●無者キリスト

いいですか、

「聖書はドラマ」

ですから、「教え」だなんて思つてはダメですよ。ドラマですから、もうシェイクスピアであろうと何であろうと、この聖書一巻のドラマにはかなわない。私は聖書のことを

「ザ・ドラマ」

と言っている。多次元的な光の世界が、絶対の世界が、相対界を絶対界に救いあげてしまう。闇を排除するのではなくて、光が闇をみんな呑んでしまつて、光の世界に変えようとしている、そういうドラマですから。

その中に自分が入つて、福音書を読めば、キリストと対話したり、あるいはキリストに引つ張り回されたり、そういう気持で――「読む」のではない――

「捕まえられ、聞く」

こういうことです。これは読む本ではない。そういう気合で読んでくださいよ。仕方がないから、「読む」と言うけれども。

「主―僕」

という関係を徹底的に100%に行つた人はイエスなんです。キリストです。だから、私は、

「無者キリスト」

と言っている。そんな言い方を言つた人は今までないようだけれども。だから、私は誤解される。

「無」

なんて言うのと、虚無かと思われる。冗談じゃない。私心の無い、自分の側が完全に明け渡されているひと。だから、僕^{しもべ}なんです。主人の言うことを「はい」と言つてきいている。

日本の昔の軍隊がそうだった。上官の命令は天皇陛下下の命令として水火も辞せずという。だから、日本の軍隊は強かつたんですよ。天皇陛下は神格的だったからね、その頃は。日本人はそれをもうひとつ突き抜けて――あの軍人精神が実は信仰の前段階だったんだ――惜しいです、それを突き抜けることをしなかつたから。内村先生は、「武士道」という角度からそのことをつかまえられたけれども。

「あなたの御意^{みこころ}です。どうぞ、私をお使いください」

というのがキリストなんです。それだから、

「私は何もできない。何も言えない」



とキリストは言っている。ヨハネ伝をよく読んでください。書いてあるから。ある若者がイエスのことを

「善き先生！」

と呼びかけたら、

「なぜ、私を善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」

なんて。もう、はつきりとキリストはそう言っている。

ですから、主たる神がキリストにとつては一切で、それを「父」とキリストは呼んでおられた。非常に信頼深く。使命的には主従の関係。本質的には父子の関係。父の子という。これは同質なんだ。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言う。何もできない無者が実は、父という無限無量者である。これはもう説明できないです、その内容はあまりに凄いから。それを100%にそれでもつて彼は貫いた。だから、福音書はもの凄い。

もう福音書を読んで、皆さん、圧倒されなければダメですよ、いい気な気持ちで読んでいたら、圧倒されてぶっ倒れると、この世界に入れるんです。

「ぶっ倒れる」

なんていう言い方はおかしいけれども。この頃のクリスチャンはあまり上品すぎるよな。

「この意味はどうだ、こうだ」

なんて、そんなことを詮索したって、くたびれてしまうだけのはなしだ。

預言者たちは、そのようにして僕として、本当に神の前に平伏したら、神の霊が来た。神霊が来た。旧約聖書において、霊的な人物はみなそのようにして神の霊を祈りの世界で受けとっていた。もちろん、それは深い祈りの世界ですよ。祈りの一番大事なのは自分を投げ出すことです。神の中に、神の下に、自分を投げ出すことが祈りの一番素晴らしい姿勢なんです――ただ身体を投げ出すという意味ではない――身心ともに投げ出す。そうすると、そういうところに神の霊がくるんです。自分を何ものかとしているところには神の霊は来ない。預言者というのは、とにかく、そういう人たちだったんです。本当に平伏している。

「²かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。

³また傷める蘆をおることなく、ほのくらき燈火をけすことなく、真理をも

て道をしめさん。……⁵天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とを

ひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたも

う神エホバかく言い給う。」（イザヤ42・2～5）

と。もうこれを読み出したらきりがなから止めますけれども。とにかく、預言書を見てください。いたるところに神の霊によって彼らが動き、また言っているということが分か



りますから。

●聖霊のバプテスマ

それでは、我々は一体どうしようかと。水のバプテスマで悔い改めて、

「悪かった、方好転換しよう」

と。それも結構なんだけれども、それではいつまでたつても始まらないんです。無教会では、

「洗礼なんてのは要らん、信仰だけだ。洗礼も聖餐も要らん」

と言っている。その気合は分かるけれども。洗礼や聖餐が要らなかったら、本当の洗礼はどうしてくれるか、本当の聖餐はどうしてくれるか、という問題にどうもあまり突っ込んでいないように思われます。なにも私は無教会の悪口を言っているのではないけれども。私は無教会の奔流にいたからよく分かってます。

無教会では、内村先生は十字架信仰一点張り。また、教会でも十字架でしようね、どこへ行つたつて。ところが、この十字架が――私はひとのことを言っているのではない。今度は自分のことです――私は無教会時代に、十字架はよく分かりました、罪の贖いはありがたいなど。内村先生、藤井先生、塚本先生の集会に出かけていって、一回といえども、

「今日はつまらなかった」

ということとはなかったです、正直。本当に感謝して帰りました。だから、私は先生方に対する敬意はちゃんと持ってます。第一巻にちゃんとお名前を掲げたでしょ。

けれども、何かちよつとどこか足りない。何だろうかと。いつかも申し上げたとおり、私が一番先に自分で書いたものが『祈りの哲学』という文章なんです。そもそも福音的な文書を書いた第一巻――それは誰にも見せてない――それは『祈りの哲学』という。祈りがどれほど人間の魂の姿として大事かということを私は考えた。それでも、何か足りない。無教会の方々は立派な祈りをする。私も立派な祈りをしたかもしれない。それは偽りではなかった。偽りではないんだけれども、どうにもならない。聖書がちゃんと分かったような顔をしていた。

ところが、1950年の11月3日――その前から手島（手島郁郎 1910～1973）さんが私にしきりに来てくれと手紙で言ってきた。私の「詩篇」（塚本虎二主筆『旧約知識』誌に連続掲載）を読んで、

「先生と一緒に集会をしたい」

と。それで――阿蘇の山の中で彼と祈禱会をした。彼はある時に本当に行き詰まって、どうにもならなくて山に籠って祈った。そして聖霊の体験をした。私は既にくすぶってはいしたが、まだ燃えていなかった。それで一緒にやったら――なにも手島君に按手してもらったのではないが――いきなり上から来てしまつて、聖霊のバプテスマを受けた。それは全身が躍動するように、また痺れた。本当にぶつ倒れた。



というのは、十字架の贖いというのが土台になっていました。これが土台になっていなかったらダメですよ。とにかく、聖霊が来てしまったです、本当に。帰りに、私は汽車の中で聖書を読むと、なにを今まで読んでいたんだろうかと思った。パウロの書簡には「聖霊」「御霊」という言葉がビンビン響いてくる。今まで読んでいたけれども、何を読んでいたかとなるほど、祈りの世界でその次元に来てなかったということがはつきり分かった。これはもう決定的な体験です。それまでは――偽りとは言いません、偽りとは言いませんけれども――非常に観念的でした。次元がまだ使徒たちの次元とは違っていた。

●「霊の貧しき者、天国はその人のもの」

それから私は、もう一遍、今度は自分で――二度くらいあるな――自分一人でもって深く祈った。そして、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

という言が響いてきた。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

とは、キリストは絶対に教えているのではない。自分を告白していらつしやる。キリスト自身が、「霊が貧しい」んです。あの聖霊の人が、自分は「霊が貧しい」という。霊が乞食のようだと。

「天国はその人のものなり」

というのは、キリストにとつては、

「神さまは彼のものなり」

と。即ち、本当に霊が貧しく、自分を何ものともしていなかったら、神が彼の中に入ってきた。

「我と父とは一つなり」

ということが言える。それで、私はキリストのまねはできませんから、十字架によって、「私の十字架によって、お前は完全に霊が貧しくされているのだよ」

と。いいですか。相対的な人間小池は、死に至るまでダメな野郎です、こんなものは。だけれども、恩寵の現実、信仰の現実、霊が貧しくされている。

「信仰の現実」というと、またこの「信仰」という言葉が災いになる。躓きになるんです。「自分の信仰はまだまだ」

と、みんな思うんだよ。信仰をまた私して問題とするからダメなんです。そうではなく、

「絶信しろ、キリストの信をいただけ」

ということですよ。

「幸いなるかな、わが十字架の贖いによって、霊が貧しくされた者よ」
と。即ち、



「霊が貧しくされた」

というのは、我執的な自分というものが全部そこに、パウロと同じように

「十字架せられたり」

ということ。あの山上の大告白のマタイ伝5章2節はガラテヤ書の2章20節と同じことなんです。そんなことを言う人はないでしょ。

「私の十字架でお前は霊が貧しくされた」

ということと、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

ということ。「われ生くるにあらず」というのは、もう完全に霊も何も貧しくされてしまつて、ゼロになっている。「無」でも、「死」でもいいですよ。私は言葉になにも拘こだわっているのではない。パウロは「死」と言つた。

「われ生く、されどわれにあらず」

という、あのギリシア語の言い方は、

「生きているけれども、私が生きているのではない」

と。相対的な人間パウロは生きているよ、あいかわらず。

「ああ、われ悩める人なるかな」

というパウロなんだ。だけれども、

「このキリストの生命をどうしてくれるか」

と言つて、彼は絶叫しているではないですか。即ち、十字架でもつて自分はすつ、飛ばされているんです。

●十字架と御霊

皆さん、いいですか、そこをはつきり受けとってくださいよ。これを受けとらなければ、聖霊の世界に来れないですから。なんにも問題ないですよ。過去の自分がどうだ、現在の自分がどうだ、将来の自分はどうだ、そんなことはもう、相対的な問題はすつとんでしまふ。私の過去をどうだこうだと言うやつは、いくらでも言わせておきますよ、私は。現在がどうだつていいですよ。将来もどうだつていいです、そんなことは。人の毀誉褒貶なんかもはや問題でない世界に入つてしまつている。それが、

「十字架せられたり」

ということですよ。もう片づいてしまつています。

「キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

とパウロが言つたが、何ですか、「キリストわがうちに在りて生きたもうなり」とは。御霊、のキリストではないですか。キリストの御霊ではないですか。キリストは天界におられる。けれども、パウロはそんな分析したものの言い方をしない。



「キリストの御霊が私の中にいる」とは、

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

ということですが。これはパウロの書簡の中に164回出てくるそうだが。これはパウロがそう言わざるをえない相互、内在の関係です。それほどパウロはキリストの中に入ってしまった。ということは、十字架で本当に彼は葬られてしまっているから。あいからわらず相対的な人間パウロの奥に、絶対的なものが来ている。そういう矛盾構造なんです、人間は。ルターが言った、

「クリスチャンは義人にして罪びとなり」

とはそのことです。そうしたら、もうどうですか、すつ飛んでしまったところに、

「天国は汝のうちにあり」

と言った。何ですか、「天国」とは。

「わが霊が汝のうちにあり」

ということですが。

●根源現実

さきほど、讃美歌で

「御国を来らせたまえ」

ときかんに歌った。けれども、私はあれを聞きながら、すぐ思った。「御国を来らせたまえ」という、

「終末の神の国を来らせたまえ」

という祈りは結構です。けれども、御国は既に来ているんです。来ているから、歌えるんです、祈れるんです。御国が汝のうちに来ていなかったら、「来らせたまえ」なんて祈ったって、そんなものは空念仏になってしまう。

本当の意味で信仰はすべて現在なんです。永遠の現在です。だから、

「信は即ち現なり」

と申し上げているのはそのこと。現なんです。根源現実なんです。相対的現実の奥に根源現実の世界を本当に受けとっているか。そこは聖霊の世界です。そこが聖霊の現実なんです。だから、この、

「われ汝のうちに在り」

「天国は汝のものなり」

ということは、この「私（キリスト）」は、私というこの天国、天国の主体です。キリストは天国体ですから。

「私はお前と一つではないか。どこを見ているか」



と、キリストは言われる。今のキリスト教は、なにも私は悪口を言うんじゃないけれども、本当に使徒たちの次元に来ていない。だから、私は死に至るまで戦います。

「使徒的次元に立ち返れ」

と言っているのはそのことなんです。内村先生がどうであろうと、このパウロやなんかの次元からはズレています。先生は火花は散っていたでしょう。けれども、なぜ、もつとはつきりとそこを仰つてくださらなかったか。残念です。先生は先生のお務めをなさったから、私はなにも言う資格はありません。我々、あとに続く者はどんどん先へ進んで行かなくてはいいかん。藤井先生は、

「内村先生の屍体しかばねを乗り越えて我は行く」

と言ったじゃないですか。私は藤井先生の屍体しかばねを乗り越えて行っているんだ。

「小池は少し藤井の信仰からおかしくなった」

なんて、私を除け者にする。勝手にしやがれた。私は使徒たちのインサイダーになったから、何と言われても一向差し支えない。本当ですよ。それが真理なんだから。

「我は真理なり」

とキリストが言われたその「真理」は概念的な真理ではない。

●南無キリスト

聖霊のバプテスマというのは何も難しくない。本当に十字架を受けとってください。そうしたら、聖霊は来るから。聖霊が来ないのは、十字架の受けとり方が本ものではないからです。観念だから。贖いという命題を信じているだけだから。気安めをやっているだけだから。

パウロはどうですか。使徒行伝のパウロ、ペテロの現実は大変なものです。現象はどうでもいいです。けれども、我々一人びとりに何か現象するはずです。それはパウロがコリント前書12章、14章で言っているとおり、聖霊の賜物はいろいろある。人によっていろいろだ。

「こういうようにならなくてはならない」

なんて一つもない。知的なこともあるし、情的なこともあるし、意志的なこともあるし、いろいろな面があります。いろんな働きがあります。どれでも結構なんです。

問題は本当に聖霊から来ているかということ。その聖霊は、土台は十字架に置いているか。十字架に置いてなかったら、聖霊は、旧約の霊と同じように、ヘタすると、サウロが始めは手当たりしだいにやってよかったけれども、そのうちにダビデに対する妬みが起きてきたら、サウロはダメになつてしまったでしょ。旧約の世界には十字架がないから。

あれほど、

「十字架、十字架」



と言っているパウロがあれほどまた、

「聖霊、聖霊」

と言っているじゃないですか。十字架と聖霊を離すことができるんですか。キリストと一緒ににいたヨハネもペテロもヤコブも、聖霊はある時点においては一時的な働きはしました。けれども、それは直ぐぬけていきました。躓いたり転んだりやっています。キリストは分かっている。

「私が受くべきバプテスマ、十字架を受けたら、それから、私は天界からお前たちに聖霊を下すから待っている」

と、先をちゃんと見越している。この十字架を通らなければ、聖霊をキリストは地上ではくさなかつた。そこが贖罪の驚くべき内容なんです。贖罪を通らないところの霊は聖霊ではない。聖霊と十字架の真ん中には復活がありますけれども。それはキリストは十字架の贖罪をしたあとに霊生として、もの凄い霊生として、彼はそこに現れてきたんだから。証明したんだ。この霊生の内容の中核をなすものはこの聖霊ですから。

とにかく、この十字架と聖霊は絶対に離すことができない。そうして、聖霊は来るから。これは祈り入ることです。祈り入る。キリストの十字架の中に自分を投げ入れる。そうしたら、聖霊は来るから。これが本当の帰入、キリストに帰入すること。帰入も祈りも同じことです。だから、私は、

「南無キリスト」

と書くんです。帰り入り、祈り入ること、全存在を投げ入れること。父の懷にキリストは居た。私たちはキリストの懷の中に入る。

「われ汝のうちに」

というのは、形容詞で言っているのではない。その現実から何でも祈ってください。そうしたら、御旨がグーッと力強くやって来るから。そこは自己がぬけているから。そういう深い内在関係。それから垂直関係、これが本当の「義」というんです。垂直関係が義で、内在関係はむしろ「愛」と言った方がいい。もう、義と愛とは一つなんです。それを「恵み」と言おうが何と言おうがいい。

パウロの書簡だって何だって楽しくてしようがない。この一点さえはつきりつかんてしまふと。パウロさんはそこからいろんなことを言っているだけのはなしで、何も難しくない。なんとこの聖書というのは易しいのだろうかと。註解書が要らなくなってしまう。註解なんて面倒くさくてしょうがない。まあ言い方が乱暴ですけどもね。

どうぞ、使徒たちと同じ次元に、同質的なところに入ってください。何と言っても、キリストは桁違いな霊の人。これはもう、聖霊の最大の

「プネウマティカ」「霊人」

はキリストですから。「霊」と言うと、なにか心靈的なことだと思うから困るんだよ。



● 霊の賜物

コリント前書12章に霊の賜物のことがたくさん書いてある。

「兄弟よ、霊の賜物^{たまもの}に就きては、我なんじらが知らぬを好まず。²なんじら異邦人なりしとき、誘わるるままに物を言わぬ偶像のもとに導き往かれしは、汝らの知る所なり。³然れば我なんじらに示さん、神の御霊に感じて語る者は、誰も『イエスは詛^{のろ}わるべき者なり』と言わず、また聖霊に感ぜざれば、誰も『イエスは主なり』と言う能わず。

あるいは、「アバ、父よ」と言うことができない。ローマ書にも、コリント書にも書いてある。

4 賜物は殊^{こと}なれども、御霊は同じ。⁵務めは殊なれども、主は同じ。⁶活動^{はたらき}は殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動^{はたらき}を為したもう神は同じ。」(コリント

前12・1～6)

「聖霊・キリスト・神」

という、三位一体的に自然に書いてある。三位一体ということは何も議論ではない。神は霊の霊なる実在者です。キリストはその顕現者です。その顕現者ということは、聖霊がキリストの中で働いていらつしやるから。聖霊はまた、この相対的歴史の中で私たちにいくらでも働いて、

「汝ら、我よりも大いなる業^{わざ}をなさん」

というのは、

「お前たちを通して、私はどんどん大きな業をしていくぞ」

ということです。我々がするんじゃないですよ。そういう聖書の言葉の、意味の奥が読めてくるんです、聖霊の世界に入ると。いわゆる注釈でなくなってくる。それは決して勝手気ままに読んでいるのではない。そのことははっきり聖霊が示す。そういう自信ならざる自信が出てくる。だから、何を読んでも、何を体験しても、全部、聖霊の光でもって、知恵でもって、それが処理されていく。

これは不思議でしょうがない。私みたいな馬鹿野郎がね、本当に不思議でしょうがない。相手がダンテであろうが、ゲーテであろうが、ドストエフスキーであろうと何であろうと。あるいは、自然科学の方でもし私にそっちの方の知識があれば、アインシュタインでも分かるかもしれないけれども。まあ、そんな知識はないからダメだけでもさ。アインシュタインという人だつて、あれは御霊的な聖霊の信仰の方だった。

異言が出なければどうのこうのと、そんなことを私は言っているのではない。ただし、異言というような現象も起きてきた。手島さんにも私にも。そうしたら、

「いよいよもつてあれはおかしい」

ということになった。私は「火渡り」はしないけれども。それはイザヤ書43章に書いてある。

「火も汝に燃えつかない」



という。手島さんはそれを実際にやったわけだ。人のやったことを、すぐあとからなんのかんのと批評することは楽だけれども、そういうことを言っているやつはダメなんだ。私は手島さんの火渡りを直接に肯定しているわけでも否定しているわけでもない。問題は、

「福音の本当の根源のところをしつかりとつかむか」

ということですから。

それで、パウロは、

「身体にはいろいろな手足やなんかがあるが、みんな全身が耳だったらどうなるか、目だったらどうなるか」

と言った。それぞれ人々の働きがある。だから、私は

「皆さん一人びとりは天下一品だ」

と言う。皆さんの顔がみんなちがうように、その使命、素質はみんなちがう。それが御霊にあるならば、それが大きな交響楽になるんです。大きなハーモニーに、有機体的構造になる。人格共同体になる。それがエクレシアなんです。この御霊がないから、

「こつちの信仰がどうだ、あつちの信仰がどうだ。その在り方がどうだ」

なんて、くだらないことを言っている。どうせ人間はそれぞれ特殊的存在だから、みんな欠陥もあるよ。そんなことをやったらおはなしにならない。

「そこでもつて、とにかく、本ものが来ているか」

と、これだけが問題なんです。

私は校長をしていたでしょ。いろんな先生方がいるよ。先生方のいいところをちゃんと見て、それをもつて私は交わってきたつもりです。依怙^{えこひいき}臆^{おそ}をしない。それぞれの善さというものがあるんだから、みんな。ずいぶん、癖のあるやつがあるよ。「この野郎！」なんて思うこともあるよ。けれども、その善さというものを見ている。それはもうひとつ上の次元に私はいるからなんです。議論したって始まらないから。

これは個人であろうと、それぞれのグループであろうと同じこと。

「誰々先生」

なんてやっているからいかん。先生は先生でいいですよ。けれども、問題は

「キリストと直結しているか」

ということ。しかし、直結がですよ、いわゆる

「信仰、信仰」

と言っているような、ヘタすると信仰が私されているようではダメです。

「信仰義認」

という言葉がヘタすると非常にプロテストタントの災いになっている。むしろ、「恵み」と言った方がいいよ。

「恵み一切」



です。

●聖霊の愛

では、パウロはその「恵み一切」を、どうしてくれたかというところ、コリント前書12章の一番終りに、

「³¹なんじら^{すや}優れたる^{たまもの}賜物を慕え、而して我さらに善き道を示さん。」(コリント前12・31)

と言つて、13章に入っている。これが愛のことを語っている。「愛は、愛は」と言っている。これはキリストの愛ですよ、御霊の愛です。パウロはここで、「キリスト」とも、「御霊」とも言っていないけれども、それでなかったら、こんな愛はありっこない。

「⁷凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事耐うるなり。」(コリント前13・7)

と。13章7節。愛は信仰も希望も持っているじゃないですか。「望み、信じ」と書いてあるじゃないですか。

「三つのうちで最大のものは愛だ」

と、パウロは言つたじゃないですか。私たちにそんな愛はありますか。

みんな、ある程度の愛はあるよね。人間が一番飢えているものは、本当は愛なんだ。キリストが愛の権化ですから。自分を十字架につけて、一切の私たちの我執を全部取り除いてしまつて、そして今度は、聖霊をくだす。永遠の生命を与える。そして、これはいくらでも人に向かって流れていく。こんな愛がどこにあるんですか。この愛が御霊でもつてやつて来ると、

「おおよそ事望み、おおよそ事信じ、おおよそ事耐え、おおよそ事担い」

と、何だつてできるんだ。これは御霊の信仰に来なければダメなんです、上っ面では。

私のところから、いろんなことを言つて逃げて行つたのがいるよ、いろんな事情で出て行つた人もあるし。けれども、私はひとつも恨んでいません。時々、祈っていますよ、その人のために。これはどこからくるんですか。御霊の力から、御霊の愛の力から来るんです。私は本当に不思議でしょうがない。愛は最大の力を持っています、御霊の愛は。

手島君が『聖霊の愛』という本を書いた。私はこれは画期的な本だと思った。手島君が亡くなってから、あつちのご連中がばやばやしていたから、

「なんだ、君たちは―」

と言つてやつた。

「『生命の光』をもう廃刊にしようか?」

と私に訊くから、

「無教会ではそれ(主催者が亡くなるとその雑誌を廃刊にすること)を今までやっていてたけれども、手島さんのこの雑誌が聖霊において書かれた雑誌なら、君たちはそ



の先を聖霊において書いて行ったらいいじゃないか」

と、はつきり言ってやった。それで初めて、彼らは非常に力を得て、今でもずっとやっているじゃないですか。むしろ、教勢はかえって強くなっている。私は、いいものははっきりいいます。人がどうだこうだなんていうのではない。

日本の仏教の偉大な坊さんたちには、私は無条件に敬意を払います、素晴らしいから。あの人は仏教の世界で使徒的な次元にいるから。本当ですよ。法然でも、親鸞でも、道元でも、凄いよな本当に。それはああいう人たちばかりではない。誰でもがその次元に入れる。一番素晴らしいものは誰でもが入れる世界なんです。何か条件がなければ入れないものは最後のものではない。最後のものは無条件に誰でもが入れる世界なんです。

「本当のクリスチャンは天才よりも少ない」

と、キルケゴールが言った。その通りです。けれども、

「天才よりもっと多いのは、実は本当のクリスチャンだ」

と、逆説的にも言えるんです。誰でもがその世界に入れば本ものだから。神さまの歴史には、全然地上の歴史には書いてないような人が本当に光っている。地上で光ったのはあつちでは消えてしまうよ。私は天国篇をもし書くなら、そんな天国を書いてやろうと思っている。

●キリストは無限無量

とにかく、キリストは無限無量の内容です、本当に宇宙的ですよ。とうてい、組織神学ではつかめない。私は第3巻で『無の神学』を書くけれども、これは組織神学ではない。劇的、神学です。どうせ、いろんなことを言われるだろう。構いやしない。もう概念でなんか限定できるような世界ではない。だから、聖書はもの凄いドラマをそのまま投じている世界なんだ。それは教えもあるよ、いろいろ教える言いい方もある。そんなものはその奥を読まなければダメなんです。それに囚われてしまうから。

「すべし、すべからず」

だって、

「できるぞ、私がさせてやるぞ」

と、キリストは仰っているんです。

私は今、聖霊の世界でものを言っているから、皆さんは、聖霊のバプテスマなんて言ったって、聞いているうちにそれを既に受けているんだ。もう十字架から入っているから。これは十字架という門なんだ。この門をくぐれば、詩篇23篇のことがし。

「緑の牧場、憩いの汀^{みぎわ}。わが酒杯^{さかずき}は溢るるなり」

と。私という酒杯は聖霊で溢れる。

「わが酒杯^{さかずき}とはどんな酒杯か」

なんて。どんなではない、君自身が酒杯だよと。



「わが酒杯は溢るるなりと、旧約ではお酒を肯定しているが、内村先生は禁酒だ」なんて。そんなくだらない議論は要らん。キリストだって飲んだよ、よく飲んだり、よく食べたり。ソクラテスだってそうだ。そんなことを律法的になんかやっているような人ではない。全部それは本当の意味で消化されてしまうんです、御霊の世界で。断食するときには四十日も断食した人です、おそろしい人です。

「御霊のあるところに自由あり」

と言うけれども、これは御霊の法則、霊法です。ローマ書8章2節にあるとおり、

「いのち みたま のり生命の御霊の法」

生ける御霊の法です。天衣無縫の世界。そういう呼吸が段々分かってくるんだから、楽しくてしょうがない。

●聖霊の力

まあ、この中にはいろいろな問題を持つていらつしやって苦しんでいる方を私は知っています。いいですよ、どう思われたって、どう扱われたって。どっこいと、担ってやりなさい。聖霊の力はそういう、

「汝を呪う者のために祈れ」

と、いくらでも祈れる。

「敵を愛せよ」

と。敵を救つてやるのが、「敵を愛する」ということです。救つてやる力はみんなこのキリストの御霊の力です。なんとなく、頭でなく身体で分かってきましたかね。そうだと、思いますけれども。

聖霊に対しては悪霊というやつがいる。悪鬼とか、悪霊とかいう。サタンです。こいつが邪魔する。けれども、悪鬼でも、神さまの許しのもとに動いているだけののはなしだ。ある時には、神さまはこいつも、お前たちはダメだと仰るでしょう。悪鬼も神さまの許しのもとにやっている。決して二元的ではないですよ。キリストは聖霊の器、聖霊のひとです。これが悪鬼をやつつけてしまふ。悪鬼に囚われていたやつがたくさんいたから。これをやつつけてしまふ。

「精神異常者」

だと普通のお医者さんは言うでしょう。精神異常ではないんだ。悪鬼が働いている。それはその人の精神の異常ということもあるでしょう。けれども、悪鬼が働く場合もある。いろんな場合がある。だから、福音書に書いてあるとおりです。

いいですか、福音書の言葉はもう本当にそのまま受けとっていかなければダメですよ。

「そんなことがあるんでしょうか？」

ではないですよ。



「参りました!」

と言って、キリストの中に入って行かないとね。

何が起きても、皆さんはちつとも恐いことはない。

「主さま!」

と祈る。「主よ」「父よ」と。これは御霊によらなければ、この叫びは出て来ない。私を贖ってくださったのはキリストなんだから。キリストを通して贖ってくださったのは神さまなんだ。

私は、直接的には「主よ」という祈りが多いんです、どうしても。キリストがもう私の一切だからね。「主さま」と祈りながら、

「主の聖名^{みな}によって」

なんてやっている。何だつて構いやしない。

聖名は実だからね。ペテロが言っているとおり、

「わがうちにあるものを汝に与える。聖名によりて歩め」

と言ったら、歩んだ。どうですか、使徒行伝のペテロは。福音書のペテロよりかもうケタ違いに次元が違っている。これは聖霊が来ているからなんです。

サウロ（パウロ）はさんざん聖霊に逆らっていた悪いやつだ。キリストという御霊の親玉に逆らつて、迫害していたけれども、復活のキリストは、

「こいつはとんでもないやつだから、これを引っくり返してやろう」

と、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか!」

と、ダマスコ途上に現れた。彼はもの凄い光に照らされて、ひっくり返ってしまった。目が見えず、飲食できない。アナニヤという人に按手されて――アナニヤというのは霊的な人物だから、手を置くと霊が伝わるわけです――キリストの霊が伝わって、

「わが眼より鱗^{うろこ}のごときもの落ちたり」

と、ガラリ変わった。パウロは本当に、

「参りました!」

と。口で言っているのではない。本当ですよ。それから彼は荒野に行つて、祈つて冥想したら、キリストの十字架がはつきり出てきた。これが元だったと。

●ドラマチックな有機体的な構造

そのパウロの構造は実に素晴らしい構造ですから。パウロ書簡の構造は大変な構造です。これはドラマチックな、また有機体的な構造です。ローマ書7章と8章とを読んでごらん下さいよ。これはドラマでなくて何ですか。ローマ書7章は地獄の苦しみ、8章は天国の歓喜。そんなものは理屈の世界ではない。それが人間パウロなんだ。しかも、天国の歓喜



が本当に勝って、どんどん進んで行った。

パウロはユダヤ教のチャンピオンで、モーセの律法を拳々服膺^{ふくよう}して、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言って、彼は非常に宗教的・道徳的チャンピオンだった。ピリピ書で言っているとおり。けれども、それは自分を誇っていた。自分の宗教的、道徳的な在り方を誇っていた。

「それはとんでもない」

と。キリストは自分を誇りましたか。

「ただ神さまだけだ」

と言って、サタンと闘ったではないですか。サタンと闘った時に、自分の霊力でやつつけようとしたですか。あの御霊のひとはいつも

「神さまだけだ」

と言っているじゃないですか。無者^{むじゃ}ですから。無者だから無限無量^{むげんむりやう}者^{もの}で、サタンに勝ていたんです。

このユダヤ教のチャンピオンがキリストに完全に引^ひつくり返^{かへ}されて、そして、この驚くべき大伝道をし、この驚くべき書簡を書いた。しかし、ユダヤ人はあいかわらず、

「パウロは間違^{まちが}ったんだ」

とやっている。頑^{かたく}なだね、ユダヤ人というは。新約聖書を認めない。

「トラー・ネビーム・ケスビーム」(律法・預言者・諸書)

なんて言って、旧約聖書だけだ。それだから一面嫌われるんだね。

キリストもユダヤ人、パウロもユダヤ人、それが完全に超ユダヤになってしまつて、全世界、全宇宙的になつてしまつた。これは神の霊なんだ。聖霊の働きが全部そのようにして働いている。キリストは全くケタ違いです。

だから、あなた方、福音書を読んでいて、もう生命が来て、楽しくてしょうがなくならなければ、うそですよ。福音書を読んでいるとは言えない。それは、聖霊の世界がそのようにして現れてくる。「聖霊」なんて福音書にはあまり書いてないんだよ。けれども、キリストの言と業は全部、聖霊の現れです。神の霊の内容なんです。神の霊の内容は何かと言つたら、キリストの言と行、パウロの書簡で言われていること――まあ、少し余計なこともパウロは言っているけれども――中心になつていること。

何となく楽になつたでしょ。聖書をそういうようにして読んでください。ちつとも難しくない。ところが、内村先生が『聖書之研究』なんていう雑誌をお書きになるものだから、無教会は、

「研究、研究」

とやっている。内村先生の本当の精神はその奥にあつただけけれども、間違えてしまっている。それは何と言つたつて、内村先生の文章は力があります。私は若い人には、内村先



生の文章を読みなさいと言いますよ。『基督信徒のなぐさめ』なんてのは素晴らしい。『余は如何にして基督信徒となりし乎』よりもいいね、あの『基督信徒のなぐさめ』の方が。『求安録』とにかく、先生は捨身で戦ってこられた方だから。内村先生のあの気魄はもう御霊の火花を発している。その後のご連中がどしどし進んでないで、ただ「内村鑑三記念講演会」なんてやったら、内村先生は逆に怒ってしまうよ、

「何やつているか!」

と。

●聖霊の執成し

ローマ書でもとにかく、こうやって聖書を開いていると、この中から叫び呻いているんですよ。ローマ書1章11節、

「われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅うせられん為に霊の賜物を分け与えんとてなり。」(ローマ1・11)

霊の賜物を分け与えようとしていると。「霊の賜物」というのは二通りにとれます。霊という賜物、あるいは霊からくる賜物。どっちでもいい。両方持っています。ローマ書の終りの方にも書いてある。

「そういうことのほか語るまじと思ふ」

とか何とか。ローマ書15章17節、

「然れば、われ神の事につきては、キリスト・イエスによりて誇る所あり。」

「よりて」ではなく、「ありて」です。

¹⁸我はキリストの異邦人を服わせん為に我を用いて言と業と、

「ロゴー」(言)と「エルゴー」(業)と、

¹⁹また徴と不思議との能力、

「セイメイオン」(徴)と「テラス」(不思議)と「デュナミス」(能力)において、

および聖霊の能力にて働き給いし事のほかは敢えて語らず、」(ロマ15・17、¹⁹)

と言う。パウロはやりきれないで、こういうことを言っているんです。30節、

³⁰兄弟よ、我らの主イエス・キリストにより、また御霊の愛によりて

ここに「御霊の愛」と書いてある。

汝らに勧む、なんじらの祈りのうちに、我とともに力を尽くして我がために神に祈れ。」

と。祈りというのは、キリストは、

「祈ったことは聞かれたりとせよ」

と言われたでしょ。「祈ったことは聞かれたり」とは、祈った通りだかなんか知りませんよ、



神さまの方の聞き方はどうか知りません。私たちの祈りなんてのは不完全なんだから。けれども、神さまの方で聞いてくださるのは、聖霊の執成^{とりな}しでもってその奥を聞いてくださる。

「結果が反対に出ようが、この祈りは一番深い意味において聞かれている」

と、そういうのが本当の信なんです。聞かれない祈りはないんです。現象的には聞かれない祈りがありますよ。けれども、もうひとつ奥で本当に聞かれている。

「お前の祈りの反対を私は聞いてやるよ」

と、神さまの方は。いろんなことがある。それだけに、神を100%に受けとることを「信ずる」というんです…(異言)…。

そういう信の世界に入る。信というなら。それが本当の祈りの世界。だから力が来るんです、本当に。御意は一番深い現実において成りつつある。神さまの御意は絶対にサタンの力より強い。我々の思いよりもはるかに、

「天の-highがごとく高い。汝らの思いと異なる」

とイザヤ書55章に書いてあるとおりです。

聖書の言葉というのは本当にドラマチックな構造ですからね。同じ平面に置いたら矛盾することがたくさんあるよ。そんな頭で読んだら読めっこない。だから、いわゆる緻密な研究はかえって躓きになる。研究書として聖書なんか書いては shouldn't。みんな、血と涙と祈りで書いているんだから。もういい加減な世の中ではないですからね。

そして、先程のコリント前書13章の、

「信じぬき、望みぬき、耐えぬき、担いぬき」

ということが本当の聖霊の愛の力だということ。そういうように信ずることが、ヨハネの言葉でいう、またホセアの言葉でいえば、

「知る」

ということなんです。信と知はその点では一つなんです。そうすると、凄い知恵も出てくる。どうぞ、皆さん、そういうことですから、もう楽しくてしょうがない。だから、

「我によらずば何事をもなしあたわす」

とは、

「我によれば何事をもできる。お前がしたいことは、私がその力を与えてやるぞ」ということ。

もつとも、「何事もできる」と言っちゃって、私にできる範囲はあるよ。私に絵描きになれと言っちゃって、絵描きにはなれない。人の真似なんかしたってダメなんだ。みんなそれぞれの賜りたる才能がある。そこに本当に天職がある。だから、私は

「天賦天職」

ということをやっているんです。

